

目的 布個有の特性は布表面の物性や形状などにもとづくことが多く、これらが布のイメージと深く関係していると思われるが、現在のところまだ十分な成果が得られていない。この原因は表面物性の測定方法が不十分であり、かつ、布が基本特性、力学特性、表面特性、色柄特性などの総合的なとらえ方がなされていないためと考えられる。本研究は毛織物の表面特性と表面イメージとの関係から表面物性の測定方法の妥当性を検討するとともに、布の表面にもとづくイメージについて先に行った綿織物と絹および化繊長繊維糸織物と比較して調べた。

方法 用いた試料は市販の毛織物28点、毛ジャージ2点、フェルト1点の32種類でいずれも白生地である。表面物性は平滑性(摩擦係数法、変角光度法)、光沢性(対比光沢度)、凹凸性(光反射法、融針法)、毛羽(圧縮率法、顕微光沢法)を求めた。イメージは言葉からくる用語、好みとの関係、SD法による調査を行った。

結果 SD法によるイメージ得点と表面物性との関係は、平滑性と摩擦係数、光沢性と対比光沢度の関係以外いずれも高い相関が認められた。好みに関係するイメージ用語の占める割合は綿、絹、毛織物いずれの場合も感覚的用语が約50%、物理的用语と表面的用语がそれぞれ約25%であった。好まれた毛織物はツイード、サキソニー、ギャバジンなどいわゆる毛織物らしい布であり、嫌われた毛織物は鬼ヶリメン、ピケモッサ、クレープ揚柳、ファンシーリングなど毛織物らしくない布に分類された。

1) オ30回総会発表(衣生活研究5 No.7, 1978) 2) オ31回総会発表(衣生活22 No.5, 1979)